

▲ たちばな 2月号

〒793-0065 西条市榎木 54-1
 TEL (0897) 57-9543 FAX (0897) 57-6221
 eメール tachibana-k@saijo-city.jp

令和6年2月1日
 橋公民館発行
 通巻518号

橋校区の人口(12/31 現在)
 総人口 1,779人 (+2)
 (男 858人)(±0)
 (女 921人)(+2)
 世帯数 828 (+2)

カラー版は西条市役所ホームページで
 ご覧になれます。

ギャラリー橋

1月、2月は
 サークル『たんぼぼ』
 の絵手紙を展示して
 います。



2月の行事予定

日	曜	公民館関係・地区行事
2	金	さわやかクラブ世話人会 (13:30~) 橋地域未来塾 防災士定例会 (19:00~)
5	月	休館日
6	火	防犯協会定例会 (19:30~)
7	水	民生児童委員定例会 (19:30~)
9	金	橋地域未来塾
11	日	休館日 (建国記念の日)
12	月	休館日 (振替休日)
15	木	いきいき橋 (西条ボール体操)
16	金	橋地域未来塾
19	月	休館日
23	金	休館日 (天皇誕生日)
26	月	休館日

2月 カワセミ号 (移動図書館)

橋公民館 8日・22日(木) 13:25~13:55

無病息災を願って

1/6、7 どうど作り 1/8 おはやし

お正月の伝統行事『とうとうさん』。子ども達が各家庭からしめ縄を集め、地域の皆さんと一緒にとうどを作り、世代間交流を深めました。おはやしでは、残り火でおもちを焼いて食べ、一年間の無病息災を願いました。



【西泉中】



【西田】



【榎木・相生】

橋地域未来塾

今年で4年目となる「橋地域未来塾」。教員OBが、毎週金曜日に橋小学校4・5年生を対象に学習支援活動を行っており、宿題やわからない所のご指導をしてくださっています。子どもたちの『学びたい』気持ちを尊重しながら、意欲的に楽しく学習しています。



未来の橋を想像しよう

1/16(火) 橋小学校で地域づくりの出前授業が行われ、6年生が卒業した先輩方から昔の橋の様子について教わりました。

その後グループに分かれ、未来の橋を想像しながら、将来住みたい橋校区を地図に描き、夢をふくらませました。



さわやかクラブ 初詣

1/5(金) 橋さわやかクラブ長寿会の皆さんが、石岡神社で初詣をし、今年の平安を祈願しました。気持ちを新たに、新年の良いスタートをきることができました。



しめ飾りづくり

12/20(水) 橋小学校5年生がさわやかクラブの皆さんと『しめ飾り』づくり。慣れない藁の扱いに悪戦苦闘していましたが、何度も教わりながら、自分だけのしめ飾りを作り上げました。



おねがい

公民館の拠点回収では、**乾電池の収集はしていません。**
 乾電池は指定袋の外袋に入れて、燃えないゴミの日(橋地区は火曜日)に各自治会のごみステーションへ出してください。



よろしく願います

2月 ローソン 移動販売

7日(水)
 14日(水)
 21日(水)
 28日(水)

- 15:00~15:15 野々市集会所
- 15:20~15:35 榎木西
- 15:40~15:55 榎木集会所
- 16:00~16:15 西泉中
- 16:20~16:35 西泉東(民部さん)
- 16:40~16:55 西田集会所
- 17:00~17:10 相生

防災講演会

地域防災力UP! 自治会で考える防災

いつ起こるか分からない災害。「自分たちのまちを自分たちで守る」には、いったいどうすればいいのか。災害時の自治会と行政の役割について、一緒に考えてみませんか?

日時: 3月2日(土) 13時30分~14時30分(13時00分開場)
 場所: SAIJO BASE 2階 セミナールーム(西条市明屋敷131番地2)
 ※駐車場に限りがあるため、乗り合わせにご協力ください。
 講師: 西条市役所 危機管理課
 定員: 30人(先着順)
 申込み: 2月26日(月)までに西条市連合自治会西条支部事務局に電話またはメールにて申し込み
 問合せ: 西条市連合自治会西条支部事務局
 (西条市役所 市民協働推進課内)
 TEL: 0897-52-1462 e-mail: shiminkyodo@saijo-city.jp

一月の俳句

福引きは全部飴玉空雲る
 散歩道欄干からのどんど焼き
 おみくじは今年も大吉初詣
 お父にゃん

大寒は父の命日十二年
 寒稽古今年は皆なで大声で
 着ぶくれて生中継のキャスター等
 ヒヤシンス
 菊日和文化財なり旧商家
 日記帳二〇冊目の年の暮
 飴色に熟し程よき吊し柿
 さくら草

たかおじょう いしかわげんだゆう げんごおやこ
高尾城 (石川源太夫・源吾父子) (I)

享禄年中(1528~1532)、周布郡の旗頭に黒川氏がありました。剣山城に居を構え、その勢力は東へ東へと延びていました。新居郡の石川氏は高峠城にあって、二大勢力は互いにぶつかり合いしばしば不和、闘争に及んでいました。郡境における領民同士の争いが原因となる両氏の大きな戦いが、2度ほど記録されています。石川氏は黒川氏を牽制すべき地を探し求め、氷見尾土居に恰好の場を見つけてここに高尾城を構築し、有利な条件で和睦を結ぶことに成功しました。高尾城が出来てからは、高峠城城主石川伊豫守の家臣である石川源太夫が、高尾城の城主として居城することとなりました。源太夫は頭脳明晰で文武両道に優れた実力者でありましたが、やがて高峠城勢に恐れられ妬まれるようになり、我儘や奢りによる陰謀の心ありとされ誘い出されて騙し討ちにあいます。場所は伊曾乃神社南東の中野村木挽原が選ばれました。



高尾城下尾土居に祀られた石川源吾

時は天文20年(1551)5月4日の端午の宵節句、話し合うとされる場所に目印として高く幟を立てることにしました。

高峠城勢は、綿密な計画の上に大勢の伏兵を潜ませ、源太夫父子と数人の従者を遠巻きにして襲い掛かります。多勢に無勢、最後は旗竿で押さえられ槍や刀で一人残らず討ち取られてしまいました。

以後、甲冑姿の武将が夜な夜な馬に乗って馬具の音を立てながら、保国寺の方向から悲壮な面持ちで木挽原の地に姿を見せたと、当地方ではずっと言い伝えられたそうです。また、端午の節句のために幟用の旗竿を立てると大風が出て毎年倒れてしまうので、この地域では現在に至るも幟を立てないということも本当だそうです。

木挽原の地には、石川源太夫・源吾・従者を懇ろに葬った「大太刀君神社」と呼ばれている社があり、今なお地域の人々によってお祀りされています。また、氷見尾土居の高尾城の麓、黒瀬への大道路に面して「桜木神社」があり、ここにも石川源太夫・源吾父子は祀られています。天正の陣の起こる1年前、即ち天正14年(1584)に名君と言われた高峠城城主石川備中守通清が病死しました。この時、もし石川源太夫・源吾父子が生きていたならば、天正の陣に際しての郷土軍の軍議やその後の情勢は変わっていたかも知れません。また郷土軍の全滅や貴重な寺社その他の消失もなく、文化財も保存されていたかも知れません。

たかおじょう
高尾城 (2)

『天正陣実記』に、「高尾の城は白雲峯を埋めて、青苔路を遮りければ…」とやや誇張的に記載されていますが、昭和30年頃に西中学校の遠足で登った時の眺望絶佳の感動的な情景は、今も脳裡の片隅に残っています。山上は人工による三段の平がありましたが、上の平は本丸の跡と思われます。周囲は切川の絶壁を利用した自然の要害だったと記憶しています。もう50年以上も前のことであり、現在は昇る道すら無いため実証できず仕舞いでやきもきしています。

太平洋戦争末期、この地形を利用して至る所に空壕を掘り、小松飛行場から運ばれて来た武器や弾薬が山の如く隠匿され、本土決戦の場として準備されました。それほど攻めるのは難しく守るには絶好の地であり、人間が潜むことのできる「蛸壺」もたくさん掘られていました。天正の陣の郷土軍の主力が籠城したのも頷けます。



写真上：里城(西の砦)より高尾城を望む

天正年間(1573~1591)は戦国時代であり、戦術も刀・槍・弓矢の時代から鉄砲の伝来(1543)により大きく変化した時代であり、その点において旧態依然たる郷土軍の装備や戦闘隊形は悲劇であったと言えるでしょう。加えて10倍以上の敵兵は、地の利も旺盛な士気も齒が立たなかったことは容易に理解できると思います。戦闘は、7月4日石岡神社の南、陣の尾の戦いから始まり、7月17日高尾城の落城によって勝負は決しています。

難攻不落を誇った高尾城も、自然の要害を利用した切川の向こう側をよじ登られたこと、鉄砲隊数百挺による一斉射撃が致命傷となったようです。野々市が原の戦いには広い意味では高尾城攻撃も入ります。また反対に高尾城攻撃は野々市が原の戦いを含むと言えるでしょう。

『豫陽河野家譜』には、「隆景軍を進めて高峠を攻め、先陣すでに伊我里川に到り、後陣なお八幡山(石岡神社)と白坪にあり、城兵まず相儀し、虎竹をして土州に遁れしめ、各々死の約をなし、檜木に出張して野々市が原に陣す。…中略…寄手また戦死するの数百騎に及ぶ…中略…隆景則ち首級を実検して之を一墳に埋葬し、自ら杖を以て墳上を打ちて曰く

討つもまた討たるも皆夢なれや、はやくもさめたり汝らが夢

隆景軍を進めて礫打(西泉と西田の中間)に至る。……」と記されています。

現在、野々市部落のみならず、天正の陣の戦場となった地域の田畑の中や道端、屋敷内など至る所に「お塚さん」があります。この戦いで散華した大勢の戦士の墓が主だと思われます。400年以上経過して動かすこともまとめて合祀することもままならず、敵か味方かご先祖さまかも判らないままずっとお祀りしています。生活の場が戦場となり多くの血が流れたことは悲劇でありました。勇敢に戦った郷土軍を讃えると同時に、戦争の悲惨さ愚かさを感じずにはられません。

国破れて山河あり 城春にして草木深し……唐の時代の杜甫の「春望」の詩が浮かんできます。